

⑤ 義民三兵衛

朝来（上富田町）、円鏡寺境内の一隅に、鐵堂祖心信士と刻まれた約一メートルばかりの自然石の石塔が建っている。

これには、向かって右側に文政九庚戌五月廿六日、左側に下村九十歩、俗名三兵衛、裏面には下村九十歩と住所の書かれた下に、文蔵、元吉、藤吉、と石塔を建てた三名の世話人の名前が彫り込まれている。この石塔こそ、義民として今に語り伝え、言い継がれている「三兵衛の墓」なのである。

文政四年（一八二一年）、今年もまた、年貢を取り決めるために、郡奉行の一行が稲の実り具合を見定めにやってきました。（これを毛見という）これは、農民の一年の暮らしぶりを左右する大変な意味を持っているため、役人の機嫌をそこなわないよう庄屋をはじめ村人のほとんどが総出で、数日間、ひたすら祈る思いで飲み食いの接待を続けるのでした。そのために莫大な費用を必要とし、村の負担は大変なものでした。しかも郡奉行の一行が帰ると、今度は、その上司である代官がやってきて、同じように耕作田の面積に対する米の取れ高を計算し、年貢を定めるのでした。これもまた、郡奉行のとき以上に接待をするため、村人の生活は苦しくなるばかりでした。

当時、農民は、米を作っても、「五公五民」といって、取れ高の半分程度は年貢米として取り上げられ、残りの米から来年のための「種もみ」を残し、その残りで家族が一年間暮らしていかなければな

りませんでした。

年によつては、天候不順（干ばつなど）によるひどい凶作きようさくの年もあり、暮らしは並大抵のものではなく、不足する食料を木の实や野草やせうにたよるありさまでした。

武士の農民に対する仕打ちしうちは、まさに、

―農民は、生かさぬように、殺さぬように―

―なたね油のごとく、しぼり取れるだけしぼれ―

そのものだったのです。

三兵衛は、何とかして、この悪政あくせいを改めあらたさせたいと日夜考え続けました。そして、ついに意を決して村の庄屋に相談しました。

「お庄屋さま、どうか、わたらの願いをお聞き入れください。」

「毛見の回数を一回にしてくれるよう、となり村の庄屋さまとも相談してください。」

「お願いしますだ。庄屋さま。」

しかし、庄屋は、

「うむっ……、直訴じきそとなれば。……うむっ……命を取られかねない。……うむっ……。」



自分や家族に危害のおよぶのを恐れ、なかなかいい返事がかえってきません。村人に相談をもちかけても同じことでした。

三兵衛は、近村の岩崎村や生馬村まで足を運び、その村の庄屋に協力を頼みましたが、これとて期待はずれに終わりました。



しかし、たび重なる三兵衛のはたらきかけに、庄屋をはじめ村人たちの心が動き、ようやく奉行所に訴えをおこすことの話がまとまりました。

訴状の内容は、

一、百姓は、米を作るのが仕事、お奉行やお代官が毛見にこなくとも、決して怠けたり米の取れ高をごまかしたりしないこと。

二、接待にお金がかかりすぎ、農民の暮らしが苦しいこと。などでした。

貧しい夕食が済み、子どもたちは昼間の遊び疲れか大きないびきをたてて寝ています。妻は暗い明かりの下で、のら着のつくろいをしています。

三兵衛は思い切つて妻にことのしだいを打ち明けました。直訴をすれば自分の命と引き替えを意味するからです。

「今、ここで立ち上がらないと、百姓の暮らしはますます苦しくなる。……お前や子どもたちを残していくことは、大変心残りだが、許してくれ。」

妻は一瞬^{いっしゅん}びっくりして、ことばが出ませんでした。が、やがて、涙をいっばいうかべた顔を三兵衛に向けながら、

「……お前さまが……そこまで決心してやりぬく覚悟^{かくご}をきめたのならおやりなされ。……わたしや子どもたちのことは、決して心配いりませぬ。……どんな貴^せめ苦にあわされようとも、ひるむことなく頑張^{がんば}ってください。……。」

夫の心意氣を理解し、村のため、農民のために決して自説^{じせつ}を曲げることなく頑張るよう励ますのでした。

その夜、二人は無言のまま一睡^{いっすい}もせず、夜を明かしました。

何日かの後、うわさを聞きつけて、役人が村へやってきました。

「おい庄屋、近頃よからぬことを村で相談しておると聞くがまことか。」

庄屋は、役人のけんまくとあまりの恐ろしさに、三兵衛や村人との約束を裏切り、

「めめつ、めつそもございませぬ。あれは、すべて三兵衛が一人で勝手にわめいていることで、私も何も存せぬことでございます。」

と、責任を三兵衛一人に押しつけてしまいました。そして、役人の機嫌をそこなわぬように酒をふるまいもてなすのでした。

役人は、酒の匂^{にお}いをぶんぶんさせながら、三兵衛の家の前に立ちました。

「三兵衛と申すのは、その方か。」

「訴状の一件で取り調べたきことがある。同行せい。」

三兵衛は、無言で役人をにらみつけました。

「お前さん。」

「おとっちゃん。」

道中、村人はおろか子どもにも出会いません。みんな、自分に罪のおよぶのを恐れて隠れていたか
らです。

奉行所でも、十分な取り調べのないまま月日が過ぎていきました。食事も満足に与えられず、痩せ
細った三兵衛は、それでも、

「お願いでございます。せめて、毛見の回数を一回にしてください。」

「決して百姓は怠けたりいたしません。のら仕事は、わしらの命です。」
と、ろう屋の中から叫び続けました。

最初、しばらくの間、村人へのいましめのために投獄しておけば、つまらぬことを言わなくなるだ
ろうと考えていた役人も、三兵衛のあまりの強情さに、ますます腹を立て、部下に命じました。

「このまま村へ帰すわけにはまいらぬ。帰せば、なお一層村の者をおりたて、一揆にもなりかねぬ。
百姓どもへのみせしめに処刑いたせ。」

「ははー、かしこまりました。」

ある夜、三兵衛は、いきなりろう番にたたき起こされました。

「下村九十歩の三兵衛、出ませい。」

三兵衛はびっくりし、やがて、この重大さに気がつきました。

「わたしはどうなってもかまいません。どうか、どうか、毛見を一回に……。」

そのうち、三兵衛は裏庭にひきずり出され、わめくので猿ぐつわをされ、両手両足を荒縄でしばりあげられ、しかも、荒むしろで体をがんじがらめに巻かれ、身動きのできないようにされました。大勢で襲いかかられ、手際よく進められたので、三兵衛の抵抗など何の役にもたちませんでした。

馬の背に乗せられ、奉行所の裏木戸から人の気配を見計らって運び出されました。

夜道はあまりにも静かでした。誰一人として話をする者もいません。馬の蹄の音だけが暗闇に響きました。

三兵衛は、いよいよ殺されると思いました。

妻のこと、子どものこと、村人のこと、そして、黄金色に実りその重さで垂れ下って風にゆれている稲穂のことなど、つぎつぎと頭の中をよぎりました。

やがて、波の音が一段と大きく聞こえたとき馬の歩みが止まりました。三兵衛はあらためて心の中でつぶやきました。

「どうか、どうか、村人のために……、毛見の回数を一回に……。妻よ、我が子よ許してくれ。

……」

結局、三兵衛は御上にたてつく犯罪者として、天神崎（田辺湾）の海に投げ込まれ殺されてしまいました。

事件の翌年、そのことが原因かどうかはわかりませんが、郡奉行の毛見は廃止となり、村人の負担もずいぶん軽減され大喜びしましたが、御上の圧力を恐れて、三兵衛のことは誰も口にしませんでした。

しかし、それから五年後の文政九年、三兵衛に対する感謝の気持ちから、同じ村に住んでいた、文蔵、元吉、藤吉の三人が世話人となり、村人の総意で墓石が建立され、大勢のお参りが続きました。

この出来事は、後の世も人から人へ語り継がれ、今もなお、供花やお香の絶えることがないそうです。